

## 「ふぐ」について ②

おやさと研究所教授  
佐藤 孝則 Takanori Sato

古くから、フグは「ふく」と呼ばれてきた。それが江戸時代の中頃になると、江戸の町を中心に「ふぐ」と呼び換えられ、その呼称が、その後全国に広がった。それでも、「ふぐ」は「不具」「不遇」と語呂が似ていることから、下関や中国地方の一部地域では、「福」につながる縁起がいい表現だということで、今も「ふく」の呼称が使われている。一方、大阪では「ふぐ」という直接的表現は使わず、「てっぽう」と呼ばれている。鉄砲の「たま（弾）に当たると死ぬ」という婉曲的な表現である。ちなみにフグの鍋料理の「てっちり」は、「てっぽうのちり鍋」という意味である。そのほか、長崎県の島原地方では棺桶を意味する「がんばん」、千葉県の銚子地方では「とみ」あるいは「とみくじ」と呼ばれている。

## 猛毒であっても好まれるフグ

呼び方はどうであれ、フグは見た目の愛嬌さや滑稽さ、そして美味しさで多くの人々に好まれているが、フグ食は生死を分ける「縁切り」の象徴的事例とされている。

豊臣秀吉の朝鮮出兵のさい、多くの家来が下関あたりにやって来たとき、家来がフグ料理を食べて中毒死するのを目の当たりにした。そのため、すぐに「ふぐ食用禁止令」を出してフグ食を厳しく禁止した。その禁止令は江戸時代になっても続き、武家社会ではフグを食べることが御法度とされていた。たとえば毛利藩では、フグを食べるとお家断絶という厳しい取り決めがあった。ただ、禁じられていたのは武士だけで、庶民は普通に食べていた。ところが、元禄や文化・文政の時代になると武士階級の人たちも食べるようになり、その記録が俳諧、落語、浮世絵などにたくさん登場する。

たとえば、歌川広重が描いた浮世絵の1枚に、「魚づくし イナダとフグと梅花」がある（下図）。この絵には、関西ではハマチと呼ばれるイナダとフグ、梅の花が描かれている。そして、「あたたかい なたのしほかせ ふくからに つほみもひらく 梅の折枝 数寿垣」という歌がその中にそえられている。



歌川広重画「魚づくし イナダとフグと梅花」。ボストン美術館のホームページより。  
(<https://www.mfa.org/collections/object/download/207170>)

江戸時代のみならず明治以降になっても、フグの調理に失敗して亡くなる人が多かったという。そのため、明治15年には「違警罪即決令（軽犯罪法）」が公布され、フグを食するものは

拘留料に処すると明記された。しかし長州藩（山口県）出身の伊藤博文は、明治21年、総理大臣に在任中、山口県内に限ってフグ食を解禁した。その後も山口県内でのフグ調理は続き、長く高級料理として特殊化されていった。戦後、昭和22年に「食品衛生法」が公布されると、各都道府県ではフグの販売に関する条例が制定されるようになった。そして翌23年、大阪府は「ふぐ販売営業取締条例」を制定し、さらに24年、東京都は日本で初のフグ調理師試験を実施した。それ以降、有資格の調理師が調理するようになり、フグ毒による「縁切り」の事態は激減した。

## 「不具」と「福」は表裏一体

中山正善2代真柱が著した『こふきの研究』の中で、「古記本」の「榊井本・五」が引用されている。そしてその中に、「うしとらのほふにふぐとゆうをがいる」（113頁）との記述がある。また「ふくとゆうもの、人間もたいしよくすれば、じみよをなくなる。よくあたるゆゑに、このりをもつて大食天の命となをさつたもふ」（123頁）ともある。このように、「榊井本・五」の中では、フグは「ふぐ」と「ふく」の二つの表現が用いられている。これは、幕末から明治にかけて、これら二つの表現があまり区別されることなく、ふつうに用いられていたからだと考えることができる。

しかし、それだけではない。むしろ、「不具」「不遇」を想起させる「ふぐ」と、「福」を想起させる「ふく」の二つは、止揚されて一つになるのではないかと考える。すなわち「不具」と考えたり「福」と考えたりすることは、単なる考え方・視点の違いであり、「不具」は即ち「福」であると思索すれば、「不具」と「福」は不可分で表裏一体という考え方になる。これは、不満・不足の思いを納消し、「たんのう」の心で通るという考え方と同じである。世上の似た表現では、「ものは考えよう」である。

人間は、母胎の中で繋がっていた母子間の臍帯が出産によって切断され、一人の赤児としてこの世に生まれる。また、人間は大食い続けると寿命を縮めて出直すことがあるが、それでも出生・出直の「縁切り」は「切ること一切の守護の理」がなければ実現されることはない。それは、フグは食べると食中りを起こし、場合によっては死にいたることに象徴される。それゆえ、フグはその理をもって「大食天の命」という神名が授けられたのであろう。

このように、人間は、臍帯が切断されることによって一人の赤児として誕生し、存命から出直へと移行する。しかしこの移行は、一般にいう現生から来生への単なる住む世界の移行ではない。そこには、現生と来生は別々のステージであるという考え方が前提にある。しかし、天理教では現世と来世は同じ場所にあり、現世がそのまま来世につながると見る（『天理教事典第三版』）。すなわち、それぞれのステージが単に移行するのではなく、むしろ二つのステージが一つのステージを意味するということである。まさに「二つ一つの理」である。

いずれにおいても、フグ食を通して「切ること一切の守護の理」を人間に考えさせることが、ご神意ではないかと考える。